教育実習に向けて

教育実習の意義

明豊中学・高等学校
校長　岩武　茂代

1　はじめに

私は、子どもの頃から学校の先生になりたいと思ったことは一度もありませんでした。なのに、なぜ教師という職業についたかというと、ひとつには第一希望の企業の入社試験に落ちたから。そして、もう一つは、とりあえず高校の教員免許だけは取っておこうと思って行った「教育実習」が楽しかったからです。つまり、教育実習で経験した生徒との交流、教えることの喜びは、その後の人生を決定づける程の力があったのです。

2　教育実習の意義について

（1）　観察する。知る。理解する。

学生の皆さんは、教職に関する講義を通し多くのことを身に付けていると思います。教育実習では、学校の様子をじっくりと観察し、それまでに身に付けた知識や考え方を活きたものとし、自身の力とすることが必要です。

観察のポイントとしては、児童・生徒の状況、教師の指導の様子、学校組織の状況、学校の特色、学校の課題、学校と地域との連携などがあります。よく観察をし、疑問点を確かめ、自分の頭でよく考えて理解することが重要です。

（2）　実践する。

教育実習では、授業、学級活動（ホームルーム活動）、学校行事、部活動など様々な実践活動を行います。どれも学校現場でしか経験できない活動であり、生徒と触れあう楽しい機会になると思います。しかし、忘れてはならないことは、どの活動も、活動を通して生徒に何を学ばせるのか、どのような力を付けるのかという教育的目標を有しているということです。このことをよく理解し、教師という立場での教育的な観点を踏まえた対応を学ぶことが大切です。

そして、教育活動の中心はやはり授業であり、教師の力の中心は授業力です。教師には、授業を通して、児童・生徒に、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」を身に付けさせ、「学びに向かう力や人間性等」を涵養することが求められています。

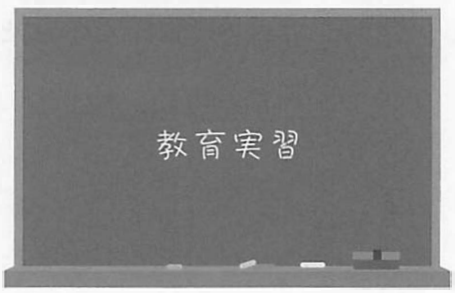
教育実習で最も力を入れ身に付けてほしいのは、授業力の基礎です。授業力の基礎として、学習指導要領を理解し育成を目指す資質・能力を明確にした授業のイメージを持つこと、授業展開に必要な基礎的なスキルを獲得することが必要です。指導教官の授業をよく観察することから始め、授業の構想、指導案の作成、授業の実践、振り返りと課題の把握など全力で取り組んでほしいと思います。

私は、授業を観察する際の観点として次の４つを重視しています。参考にしていただければ幸いです。

①授業の目標（生徒に付けたい力）が適切か。
②目標に沿って適切に授業を展開しているか。
③適切な発問を行っているか。
④生徒の興味・関心を高め、力をつける工夫をしているか。

（3）　考察する。

これまでの学習と教育実習での経験を総括し、自分にとっての課題は何か、教職を目指すに当たってどう取り組んだらよいか考察してください。教育実習は実践を通して、自らの適性や進路を考える重要な機会です。そのため、事前学習、事後の考察ともに十分に行い、実習を意義あるものにしてほしいと思います。



積極的な生徒指導

別府市教育委員会学校教育課
指導主事　藤原　良浩

子どもの成長を支援する生徒指導のポイントと題しまして、「生徒指導とは」「授業づくりと生徒指導」「学級づくりと生徒指導」「チーム学校で行う生徒指導」の４つの視点で講義を行いました。

皆さんの服装が整えられ、メモを取りながら真剣に講義を聞く意欲的な姿勢が、大変印象に残っています。

皆さんへの講義内容を思案していると、私は教育実習でどんなふうに子どもたちに接していたのか、教員になった頃はどのような指導をしていたのかと思い返し、子どもたちの表面的な理解にとどまり、適切な指導ができずよく悩んでいたことを、思い出しました。

私の子どもへの接し方が変化したのは、今までに出会った先生方の指導方法や教育観に触れることで、自分なりに見直しを行い、参考になるところを積極的に取り入れていったからです。講義の中でもお伝えしましたが、皆さんも謙虚な気持ちを大切にし、教師という自覚を忘れずに教育実習に臨んでほしいと思います。

子どもたちは、知的好奇心や学習ができるようになりたいという思いを持っています。皆さんは、そうした思いに応えようとコツコツと努力を積み重ねてくことで、子ども理解や授業づくりにつなげていってほしいと思います。また、子どもたちを授業だけでなく、学校生活全体で成長させるといった視点を持ってください。生徒指導とは「児童生徒の自発的かつ主体的な成長・発達の過程を支援していく働きかけのこと」と示しました。どのような子どもたちを育てるのか、どのような働きかけであれば望ましい大人へと成長していくのかなどを考えながら、登校時のあいさつや授業、特別活動の時間など、登校から下校までの１日中「積極的な生徒指導」を心掛けてほしいと思います。「積極的な生徒指導」を進めるには、子どもたちとの適切な関係が必要です。そうした関係づくりのために、最後まで聴く、否定しない、相手の関心に関心を持つ、同じ立場で考えるなど、子どもたちに関わり話をよく聴いてあげてほしいと思います。

子どもの問題行動の背景には、家庭や人間関係、本人にまつわる要因など、様々な原因が考えられます。トラブルや困りが発生した場合は、一人で抱え込まずに、同僚の先生やスクールカウンセラーなど、様々な人たちと協力して組織的に解決していくことが大切です。ケースによっては、外部の相談機関や医療機関と連携することもあるでしょう。様々な視点から解決へと導いていく組織的な対応は、今、学校に求められています。「チーム学校」の一員として、子どもだけでなく先生方とのコミュニケーションも大切にしてほしいと思います。

教育実習では、皆さんそれぞれが描いている理想とする教師像に向かって一生懸命努力してください。そうすることで、皆さんのこれからの教師人生を支える土台が作られるものと思います。皆さんの今後のご活躍を期待しています。

教育実習の実際

明豊中学・高等学校
副校長　丸馬　寿

令和元11月29日（金）の講義で、教職希望の皆さんに「教育」と「学び」、さらに教育現場での実際についてお話をしました。

「教育は環境である」とか「教育ほど確実な投資はない」、あるいは意外と知らない「挨拶の力」や「AIに勝つのは教育である」などの迷言を弄（ろう）してしまいました。その後、受講者の皆さんからの身に余る感想を読みながら、本当に恐縮してこの原稿を書いています。

しかし、現在、教育の現場にまだいる身として、高い「志（こころざし）」や強い「熱（エネルギー）（量）」を持って、私たちと同じフィールドに果敢に挑戦そして加担してほし

い、と強く願っています。教育実習で人生が変わった（ターニングポイントだった）小生からの偽らざる思いです。

そして、さらに誤解を恐れずに言うと、経験上「教育は絶対値でもある」のです。上へ行っても（成功・上手くやれても）、下へ行っても（失敗・しくじっても）、結果的にその（教育活動）状況は、絶対値・プラスに働くのです。当然長い目で見てですが。

「失敗してもいいがな…、人間だもの」と相田みつを風に言うつもりはありませんが、最後に「初めて教壇に立ったときの５ヶ条」を、教育実習生へのエールとしてお贈りします。

①「教材研究」をして、し過ぎると言うことはない。「教材研究」が全て。ただし、（授業は）無理に予定通り進めようとは思うな。必ず失敗する。

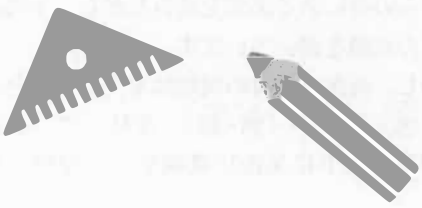
②最初の授業ではいきなり授業を始めよ。自己紹介したりさせたりするのは、高等テクニックが必要だ。この時点で学力（知識）だけが生徒より勝っている。

③生徒の人気を得ようと冗談を言っても生徒はわからない。やけど（失敗）のもと。時流に乗った「ジョーク」とて十年一昔、いや三年一昔である。

④毅然とした態度と明るい表情の組合せ（バランス）が大切。特に教室のドアを開けたときは明るく、しかし笑ってはダメ。生徒は意外？にも（超）敏感である。

⑤黒板（最近はホワイトボード？）に向かってしゃべるのは最低。一人の生徒に話しかけるような気持ちで説明すると良い。生徒を十把一絡げ（じっぱひとからげ）で見ない。

皆様の今後のご活躍を心から祈っています。



教員としての成長を支えてくれた子どもたち

別府市教育委員会
学校教育課　山田　慈子

この度は、令和３年度の教育実習に係わる「実習指導（事前の指導）」の講師として貴重な機会をいただき感謝しています。当日は、積雪のため臨時休講となりましたが、後日資料を通して皆様に学習指導に関する内容や私の教職への思いをお伝えすることができ、大変嬉しく思います。

私は好きな英語を学びたいと願い、大学では英米文学科を専攻していました。教職課程も履修していましたが、当時の私に明確なキャリアプランがあったわけではありません。そのような私を「教員しかない」と決意させたのは、教育実習で出会った子どもたちでした。学級で生活を共にした子どもたち、授業をした学年部の子どもたち、皆が温かく私を迎え入れてくれました。上手く授業のできない私を支え、励まし、別れの時には教員を目指して頑張るよう勇気付けてくれました。私にとって教育実習は、人との触れ合いと感動に溢れ、充実したものでした。最終日に渡された寄せ書きは、今でも大事にとってあります。あの時の私を、教員の道に進むよう後押ししてくれた子どもたちに感謝をしています。

教員の仕事は、子どもたちに、これからを生きるための資質・能力を育むことです。新型コロナウイルス感染症の拡大によって世界的な脅威にさらされている現状を、私たちは予測していたでしょうか。今の子どもたちには、大きな時代の変化にも柔軟に対応する力、知識や技能を駆使し試行錯誤しながら新たな課題を解決する力、多様な考えをもった人々と協働する力等、様々な力が求められています。そして教員には、それらの力を学校教育の中で子どもたちに付けることが求められているのです。教員は、子どもたちの「生きること」に関わる責任の重たい職業です。ですから、日々研鑽を積んで、その技術

を磨き、最善の教育を子どもたちに提供しなければなりません。大村はま先生は「伸びようという気持ちのない人は、子どもとは無縁の人です」ということばを残しています。そのことばに添えて、教師は研究や研修を通してこそ、子どもの伸びたいという気持ちに共感でき、世代を超えて子どもと共にあるとおっしゃっています。教師と子どもは「学ぶ人」として同じであり、同じであることが互いを対等で、尊敬し合える関係にするのだと私は捉えています。

教員を始めた時から今まで、私は一心に子どもたちの成長を願い、教員として何をすべきか考え実践してきました。それと同時に、私は教員として子どもたちに学び、時に支えられ、成長してきたのだと実感しています。

皆様にも、教育実習でのよい出会いがありますことを心より願っています。

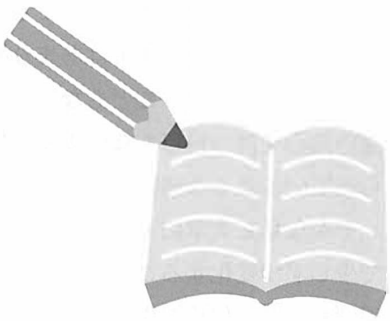
人との関わりが全ての土台

大分県教育センター教育相談部
指導主事　伊藤　由紀

今回、教育実習事前指導で、「社会情勢と教育課題」と「学級集団づくり」、「求められる教師像」についてお話をさせていただきました。

学生さんたちが、真摯に講義を受ける姿にふれ、私がかつて学生だったとき、このような実習に向けての懸命な思いがあっただろうか、自分を振り返る良い契機となりました。

私は、特別支援学校の教員です。大学生のときから、特別支援学校（当時は養護学校）の教員を目指し、特別な支援が必要な子どもたちや保護者とボランティア活動等で関わる機会が多くあり、教育実習を高いハードルとは思っていませんでした。しかし、現実は甘くありませんでした。毎日朝夕の教室の環境整備、様々な特性を持った子どもたちへの指導及び支援、放課後の担当教員からの指導、実習日誌、指導案作成、研究授業等、やらなければならない業務の多さに、教員になることの大変さを痛感させられる日々でした。ただ、その大変さの中で、自分が考えた子どもたちへの指導や支援が、ほんの一瞬ですが、子どもたちにつながったとき、この上ない喜びを感じたことを今も忘れることができません。一生懸命、子どもたちや保護者に向けて努力しても、つながらないことや反省することの方がとても多いのが現実です。でも、「つながった！」と思える一瞬があることが、教員を続けられる原動力になっていると考えています。

子どもたちや保護者と「つながる」ためには、信頼関係をまずしっかりとつくることが必要です。学校の先生だからという理由で、信頼してもらえる世の中ではありません。自分はどんな人間なのかを知らせ、子どもたちのどんなことに関心を持っているのか、知りたいのかを伝え続けることを怠らない、これがとても大切です。どんな子どもや保護者も自分たちに関心がある先生になら、悩みを話してみよう、聞いてもらおうと思ってくれます。この関心を持つということが人との関わりの始まりだと私は思っています。人との関わりを土台にしていれば、授業作りや集団活動、学校内外で行われる活動全てがスムーズに行われていくと思います。学生の皆さんには、良い人間関係を育むことを心がけていって欲しいと思います。初めから、うまくいくことはありません、うまくいかないことの方が多いのが当たり前です。でも、あきらめずに地道に続けていくことで、きっと一瞬のつながりが増えてくると思います。

最後に、皆さん一人一人が、子どもたちの力と意欲の向上に努力し、子どもたちを笑顔にできる教員を目指して、教育実習に臨んでいただけたらと思います。応援しています。